

令和5（2023）年度 第1学期始業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

いよいよ社会は、ポスト・コロナと言うべき局面に差しかかってきました。人の集まるイベントが増え、モノの流通も盛んになり、街を行きかう人々の様子も久々に生き生きしているように感じます。海外との人の行き来も着実に戻りつつあるようです。しかし私は、年度初めの時期であることが影響してか、あたかもここで線が引かれたかのように、「さあ、これからコロナ後の社会が始まります、ヨーイ、ドン！」とされているように感じ、どうしても違和感を覚えてしまいます。もちろん、こここのところの感染者数を見るに、前週を上回る傾向が続いており、第9波の到来を指摘する向きもあるということにも、その理由の一端はあると思われます。しかし、私が感じている違和感は、それとはまた違ったところから生じているような気がするのです。

経済が再び動き始めるのを心待ちにしていた人々が、非常に多く、しかも確実にいることは明らかです。しかもその思いは、例外なくとても切実なものであるはずで、すなわち、経済を動かすことについては、まったく異を唱えるものではありません。しかし、浮き立っている現在の街の様子を見てみると、この3年に及ぶコロナ禍において、経済の停滞のあおりを受けたことだけではなく、感染症自体やその後遺症によって、あるいは抗いがたく強まった同調圧力や誹謗中傷によって、どうしようもない打撃を被った人々の苦しみが、思われてならないのです。そうすると、今の回復の速度が、何だかとてもきついものを感じられてきます。何となく気後れしているうちに置いて行かれてしまうような気がするとか、その速度についてこうとするうちに、コロナ禍で学んだ大事なものを忘れてしまうのではないかという、そんな恐れにも似た感覚です。このような心配は、おそらく杞憂なのでしょう。誰しもがギリギリのところまで堪えていたのだから、味わった苦しみをそう簡単に忘れることはない、そう思います。でもやはり、コロナ禍で得た悔恨を分かち合っていると実感していきたい、それを各々が記憶にとどめていることを確かめ合っていたいという思いが、どうしても湧き上がってくるのです。

我が校においても、いよいよ学びを本来に形に戻していこうという方向で動いていかねばなりませんし、実際にそのように動き始めています。駒場東邦が本来持っている学びのかたちは、多様な視点のあり方を許す容量をもち、学ぶ者に喜びをもたらすものと自負していますから、これは是非取り戻していかなければならない。そしてそこでは、この3年の間に本校で学び卒業していった諸君や、今在校している君たちが、思い残した感覚——それは様々な視点による多様な感覚です——を、記憶にとどめて共有していきたい、つまり、この方法が正しいのだ、これが良いに決まっていると、矢継ぎ早に決めつけてしまわずに、ある時間をかけて、じっくり確かめ合いたいと思うのです。そうすることで、より強く、しなやかに持続する形で、学びの豊かさを実現できていくように思います。本来の学びの形を取り戻していくためには、学習者たる生徒諸君の主体的な取り組みが必須であると、私は再三申し上げてきました。皆さんは、私の呼びかけの如何にかかわらず、初めから自分ごととして、よく取り組んでいると思います。特に、間近に迫った体育祭に関する6年生諸君の取り組みは素晴らしいものです。非常に悩ましい課題が山積であるのですが、受け入れがたい事柄までもしっかりと正面からとらえて、実に誠実に考えてくれています。諸君のこの真摯な取り組みが、将来、より大きなキャパシティを持った学びの枠組みとして、確実に形を現してくるものと信じています。

ところで、先日私たちは、音楽家・坂本龍一さんの訃報に接しました。先月、終業式の際にお話ししたのに引き続いて物故者の話題になってしまい恐縮なのですが、それだけ大きな衝撃をもって受け止められた出来事であったと思うのです。坂本さんは世界的に評価されている音楽家であり、彼がイエローマジックオーケストラで発信したテクノポップは、インターネットなどない時代にあって瞬間に世界に浸透していき、いまだに輝きを失わずに世界の音楽シーンに影響を与え続けています。その坂本さんが、自らの音楽キャリアのスタートにおいて、むしろ音楽の限界を感じていたというのは、非常に興味深いことです。強く心動かされることを音楽で表現するという事は、それが他者に伝わるように抽象化するという事であり、そうするとどうしても個的な体験——その痛みや喜び——からは離れ

ていってしまう、そこに欠損感があるというのです。この悩みを坂本さんは、自らが初めて作曲に取り組んだ幼稚園のころ——作品は「うさちゃんのうた」だったそうです——に感じたと言うから驚きです。また、東京芸大の学生であったころの、作曲家・武満徹と出会いは、よく知られたエピソードであるようです。高校時代に学生運動に身を投じた坂本さんは、和楽器を用いた武満の作品を、いわゆる「右」であると断じて、友人とともに武満の演奏会の際に抗議のビラをまいたのだそうです。ところがその場で武満から直接声をかけられ、30分ほど話をするうちに、坂本さんは武満にすっかり心酔してしまい、以来武満が亡くなるまで親交が続いたというのです。二人の音楽的キャリアは全く異なるものですが、その奏でる音楽への姿勢はとても似通っていて、いわゆるノイズとされる音を音楽に取り入れようとするものでした。武満はそのエッセーで、地下鉄の暗い車内でその騒音を音楽に取り入れることを着想した——それだけが人々の実感とつながった、温もりを表現できる音であり、譜面上に整然と並べられた音符が示す音が、人々の実感とかけ離れたものであるのとは対照的である、と述べていますが、この姿勢は、坂本さんの音楽にも通底するものであるように思います。坂本さんは、原発反対を唱え、神宮外苑の再開発にも抗議の姿勢を表して小池知事にその旨の手紙を送るなど、社会活動にも取り組んで話題になりました。それは、彼の音楽への姿勢と相まって、声の小さい者たちの実感するところに寄り添った、彼の生き方そのものを示すものだったのではないのでしょうか。巷にあふれるノイズが寄り添う、一人ひとりの生活における実感を、音楽に表すという坂本さんの試みは、コロナ禍を通して顕著になった、声高な言説に抗えずに、一方で不安定さを増す世界の状況を見るに、今こそ聴き直してみるべきものなのではないかと感じます。

ともあれ、方法を決めつけずに、悩むべきところはじっくりと悩みたい、悩まねばならないと思うのです。

今日の式辞ではそのことを話そうと考えていたところ、劇作家の平田オリザさんが昨晚のラジオ番組に出演して話しているのを聞いて、思わずこれだと叫んでしまいました。平田さんは、兵庫県に3年前に設立された「芸術文化観光専門職大学」の学長を務めているのですが、設立から3年経過したということは、いよいよ学生たちの進路について考えるべき時期に差し掛かっているわけです。そのラジオ番組で、進路選択に悩む学生たちをどう指導するか、と問われたところ、平田さんはひとこと、「大いに悩ませます」と語ったのです。さらに、彼の大学の教育課程においては、学生たちが存分に悩むための材料は、ふんだんに用意してあると述べているところから、平田さんの表現活動から教育活動までを貫く、確固たる信念を感じる思いでした。

時間はなくはない、と思います。急激に社会が動き出した今、焦らず、いや焦ってもいいですが、しっかり悩んでまいりましょう。

以上をもって、本日の式辞といたします。

令和5（2023）年 4月8日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦